

書 評

林紀代美編：『漁業，魚，海をとおして見つめる地域 地理学からのアプローチ』冬弓舎，2013年3月刊，287p.，2,800円（税別）

津々浦々という言葉があるが，島国である日本では，海岸線上に多くの漁業集落・漁港が存在する。そこでは沿岸環境を背景に様々な漁業が営まれ，豊かな魚食文化が伝えられてきた。日本には漁業・水産地理学に関する多様なフィールドおよびテーマが存在する。しかし経済的な地位によるのだろうか，日本の地理学会において漁業・水産業に向き合ってきた研究者は必ずしも多くはない。このような状況下で，これまで漁業・水産業に特化した地理学的調査・研究の入門書など望むべくもなかった。

本書は漁業・水産業の研究に取り組む15名の研究者によって編まれた漁業・水産地理学に関するいわば初の入門書である。编者によると本書は，執筆者それぞれが取り組んでいるテーマについて，漁業や魚・海に注目する魅力，研究に着手した経緯，フィールドワークの具体例，地理学からのアプローチの魅力や意義に留意しながら「その人らしく」語ってもらうことを目的としている。

全体は「Ⅰ 漁業活動と資源，地域，人びと」，「Ⅱ 漁村や水産地域，沿岸域の生活・文化，環境」の二部構成となっており，それぞれ三つのパートから成り立っている。第Ⅰ部は漁業の経済活動としての側面に着目し，漁村や水産資源の利用，水産物流通といったテーマを扱う。第Ⅱ部では魚食文化や災害といった漁業・魚・海をめぐるより幅広い側面に着目している。

各部の内容に移ろう。まず「Ⅰ-A 漁業地域の形成と人びとの営み」では，漁業者の集団であ

る漁協や漁村・漁業地域に関する論考が展開する。「漁業者の暮らしと地域経済（田中央朗）」では，漁協や漁業生産組合などの漁業経営組織が持続的生産に果たす役割について説明している。続く「若い担い手の多い小呂島での調査（山内昌和）」「漁村と背域関係の研究から水産物行商研究へ（中村周作）」では，漁村研究の具体例が，それぞれの卒業・修士論文研究の体験を踏まえて生き活きと語られる。

次の「Ⅰ-B 漁場や資源の利用から見る地域」では，水産資源の利用・管理という観点から三つの論考と一つのコラムが展開する。まず「漁場（水産資源）利用と管理のあり方について（田中央朗）」では，瀬戸内海における広域的漁業管理組織の構築と，その成立要件について説明する。続く「マレー半島華人漁村におけるフィールドワーカー小規模漁業の調査方法を考える（田和正孝）」では，公的統計で実態把握が困難な小規模漁業をとらえる視点と調査手法について，「時間地理学から見た漁獲をめぐる漁業者の行動—漁師はどのようにして漁場を決定するのか（中村周作）」では，旋網漁船の漁場利用を取り上げ，研究体験を基に説明する。どちらの論考でも，それぞれの著者によるまさに職人芸とも言えるフィールドワークの裏側が垣間見え，大変参考になる。「コラム 16・17世紀におけるヨーロッパ海域の利用をめぐる諸問題（柿本典昭）」では，ヨーロッパ列強の海域利用をめぐる交渉過程がわかりやすく解説される。

第Ⅰ部を締めくくる「Ⅰ-C 水産物流通・消費から見る地域」は流通・消費に着目した四つの論考と一つのコラムからなる。まず「産直『鮮魚ボックス』の仕組み（深瀬圭司）」では，福島県相馬双葉漁協原釜支所が行う鮮魚類のネット通販事

業である「鮮魚ボックス」についての研究経緯を説明し、その現代的意義を考察している。続く「魚の流通・消費をとおしてつながる地域や人びと(林紀代美)」では、日本におけるシシヤモ生産・流通と、北欧・カナダにおけるカペリン生産・流通を題材に、グローバルな水産物流通と地域間の結びつきについて考察する。「オーガニック・ナマズ? 一有機認証とメコンデルタの養殖(池口明子)」では、ベトナム・メコンデルタにおけるナマズ養殖の展開を取り上げ、近年の「有機認証」の高まりについて論じている。前の林論文と併読すると、グローバルに展開する現代の水産物流通の面白さに気づく。続く「北海道のニシン・サケ・コンブ(片上広子)」では、松浦武二郎資料を用いたアイヌ漁業研究の経緯が述べられる。最後の「コラム 水産地理学に関わる私の研究経緯(篠原秀一)」では、漁港・地域ブランド水産物研究に関わる著者の研究歴が述べられる。

第Ⅱ部では、まず「Ⅱ-A 漁業・魚食に関わる地域文化の形成」として魚食文化や漁業移民に関する三つの論考が展開する。「酒と肴の文化地理(中村周作)」では、宮崎県における焼酎飲酒文化と伝統的魚介類食文化に関する調査とその成果について述べられる。続く「回游魚利用をめぐる文化地理(橋村 修)」では、現在は国内外で評価の分かれるシイラの利用について、日本における食文化やその変容が述べられる。前の中村論文と併読すると、各地で連綿と伝えられてきた魚食文化のローカルな価値を見出し、保護する必要性を強く感じる。続く「漁船名を考える(河原典史)」は、日本からカナダへの漁業移民研究の経緯と、研究資料としての『漁船原簿』の有用性について述べている。末尾に韓国の漁船原簿ともいえる『漁村契現況』について触れているが、世界各国には他にも同様の資料があるのだろうか。魅力的な資料である。

「Ⅱ-B 水産業に関わる環境とその持続的利用」では、水産業・漁業と自然環境との関わりに着目した三つの論考が展開する。「アマの行動から見る持続的な資源利用と環境認識(池口明子)」では、三重県志摩半島におけるアマ漁業を例として、彼女らが漁場環境や漁業資源をいかに認識し、漁獲するのか、すなわち海女の資源利用の文化生態的側面に関する調査・研究体験が述べられている。続く「アユ養殖業の地域展開から見る『自然と人間の関わり』(井村博宣)」では、筆者のライフワークともいえるアユ養殖業研究をとりあげ、地域分化と地下水条件との関わりや、半天然アユの導入、種苗放流による冷水病の蔓延といった様々なトピックが述べられている。アユ養殖業を通してみた人間と自然の関係の多様性が丁寧に説明されている。「琵琶湖の水産業と環境問題(塚本礼仁)」では、琵琶湖の環境変化と、伝統漁業・水産加工業の現在について現地調査を踏まえて述べている。最後の「『海のツーリズム』と漁業(磯部 作)」では、近年活発になっている漁村地域の活性化方策(体験漁業・直売など)について、いくつかの事例をもとに説明する。

最後の「Ⅱ-C 沿岸部が抱える課題に向き合う人びと」では、沿岸部と環境保全、災害といったテーマについての論考が展開する。冒頭の2編「沿岸海域の環境保全と環境再生(磯部 作)」 「埋立てを中心とした沿岸域の開発の問題(磯部 作)」では、これまで臨海部開発と漁業との関係や、海底ゴミ問題について調査研究に取り組んできた磯部による研究経緯が述べられる。最後の「災害に強い漁業地域・沿岸域を目指して(林紀代美)」では、高知県や宮城県の漁業地域における自主防災組織やその活動、漁協を通じた災害対応を挙げ、漁業地域・沿岸域での防災・減災に向けた自主的取り組みの重要性を強調する。その上で、地域の環境や課題を的確に把握することのできる

地理学・地理教育が地域防災力の向上に貢献できると主張する。

以上、本書の内容を網羅的に紹介した。編者が「あとがき」で指摘しているように、漁業・水産地理学をメインテーマにしている研究者は日本の地理学会において確かに少ない。しかし、漁業・魚・海を対象とした地理学的研究は、例を挙げれば漁村構造・食文化・資源利用(管理)・災害など多彩であり、その意味で未だ未着手のテーマも残されているだろう。本書は20の論考と二つのコラムで構成されており、通読すると漁業・水産地理学の多彩な魅力が伝わってくる。また、フィールドワークの実際を進め方や特殊な史資料の利用などについて丁寧に解説されており、優れた入門書と言えよう。

しかし入門書であると同時に地理学の専門書として本書を捉えるならば、扱われているテーマも手法も多彩であるが故に、漁業・水産地理学という領域におけるそれぞれのテーマの位置づけがわかりづらくなっている点も否めない。欲を言えば、冒頭で漁業・水産地理学という領域の展開を踏まえた上で、各論考を位置づけるような体系的な説明があると、より初学者の理解を助けるだろう。同時にそれは、今後の漁業・水産地理学の方向性を示すことにもなるのではないだろうか。とはいえ、それはむしろ評者を含めた漁業・水産地理学に取り組む者に残された課題でもあるといえよう。

本書を通読して、評者が卒論に取り組んだ8年前に出会いたかったと率直に感じた。本書によって、日本の地理学会において漁業・水産地理学研究に取り組む仲間が増えることを願ってやまない。

(横山貴史)